



祐介の目

No.175

大田祐介 (福山市議会議員)

母・大田祥子

5月20日は22年前に母がチヨモランマ(エベレスト)に登頂した記念日であり、命日でもある。いまだに「祥子先生にお世話になった」と礼を言われる方が多く、母の人は大したものだ。人は二度死ぬ。最初の死は肉体的な死であり、二度目は人々から忘却された時である。母の二度目の死は当分先になりそうだ。

母の人生はひとえに努力の人であった。医師であり、登山家であり、農業者でもあった。津山高校に進学してから一人暮らし、七輪で炊事を行い、苦学して医学部に進んだ。大田記念病院では糖尿病専門医として多くの患者・家族から慕われた。登山に目覚めてからは毎朝4時半起床で水香の妙見社の石段を駆け登り、必ず裏参道を降りて登り返していたので、通算一万回登っただろう。さらに家庭菜園と言うには広すぎる農園で多彩な野菜を栽培していた。

会にも十分通じるものだった。いかに時間を有効に使うかという母の人生の指針がこの本の中にある。多くの方に推薦したい。

母の墓は明王院にあるが、実際はチヨモランマの8600m地点に眠っている。孫の代くらいには収容に行けるかもしれないので、没後十年の節目に標高5400mのベイスキャンプを訪問した。3日間ランドクルーザーでチベツト高原の凸凹の悪路を走って着いた先に巨大な屏風のようにチヨモランマは屹立していた。孫の胸にも響いただろう。生前の母は口癖のように「人生は終わりがあから良、最後の時をいかに上手に迎えるかが大切」と話していた。自ら実践が母の motto であり、チヨモランマ登頂というこれ以上は無い人生の幕引きをした。私の22年間の議員生活を母は評価してくれるだろうか？私も母を見習い、悔いの無い人生を送れるよう努力したい。

母の遺品の中から一冊の本を見つけた。「自分を鍛える」ジョン・トッド著/渡部昇一訳である。読んで驚いたことに母はこの本の内容を忠実に実践しており、二百年前の本であるが現代社